

第4回東アジア島嶼海洋文化フォーラム

日 程：2016年10月3日（月）～10月7日（金）

会 場：台湾海洋大学人文社会科学院

参加者：小熊誠、泉水英計、前田禎彦、渡邊欣雄、越智信也

第4回東アジア島嶼海洋文化フォーラムに参加して

泉水 英計

10月3日から5日間にわたり台湾基隆市にて4回目となる東アジア島嶼海洋文化フォーラムが開催された。東アジアの海と島の調査をすすめる研究者が一堂に会するこの国際学術会議は、韓



写真1 会場となった台湾海洋大学

国・木浦大学校島嶼文化研究院設立30周年を期に発足し、以後は中国と台湾、日本の研究機関が輪番で主催者となり毎年開催されている。本年は台湾海洋大学人文社会科学院がホスト役となり例年と並ぶ盛会となった。

海洋大学人文大樓大講堂での開会式の後、半



写真2 最終全体討論の様子



写真3 基隆社寮島の巡見



写真4 杜寮島沖縄漁民の碑



写真5 新北の三貂角燈塔



写真6 宜蘭の亀山島



写真7 基隆の城隍廟

数の参加者は同じ建物上層の大教室に移動し、終日2会場で研究発表および討論がおこなわれた。午前と午後それぞれ2つ、計8つの分科会が設定され、36本の研究が発表された。神奈川大学日本常民文化研究所からは、小熊誠所員が「『日本近世生活絵引』から見る琉球と中国・日本の交流」について、前田禎彦所員が「伊予二神島と二神氏——戦国時代の瀬戸内海——」について研究発表をおこなっている。

ディシプリンを異にする専門家が集うと議論の統一性を確保するのがむずかしい。しかし、歴史的に密接に結びついた東アジアという地理的な研究対象が明確であり、さらに本年の主題である「沿岸地区と島嶼文化」へと問題が焦点化されたことにより、各発表で提議される問題について、他の発表者も聴衆も学術的関心を共有し、一定の共通理解を基盤に議論に参加していた。分科会終了後には再び一つの会場に全参加者が参集し、参加諸機関の代表がそれぞれ全般的なコメントをのべる機会がもうけられたことで統一性が再確認された。一般聴衆をのぞく参加者は50名であり、台湾から台湾海洋大学、台湾師範大学、澎湖科技大学、中央研究院、中原大学の研究者が参加し、中国からは海南省社会科学院、上海海洋大学経営院および人文学院、広東海洋大学、中国海洋大学、山東海洋経済文化研究院、暨南大学文学院が、韓国からは木浦大学校および国立海洋文化財研究所が研究者を送った。日本からは常民研以外に鹿児島大学および関西大学の教員が研究発表をおこなった。

2017年の第5回フォーラムは常民研が主催し、愛媛県松山市で開催する。同実行委員会の渡辺欣雄氏と泉水英計、国際常民文化研究機構事務局の越智信也氏が参加機関との連絡および運営作業の確認のために同行した。今回同様に、学問分野も言語も異なる研究者がそれでも統一性をもって学究を発展させる機会を提供できるよう準備に万全を期したい。